

群 教 七	G17 - 02
	令3.278集
	多文化共生 教育

言語の違いを越え、自信をもって活動できる 外国人児童の育成

——在籍学級での学習を想定した日本語指導と

ICTの活用を通して——

特別研修員 菅野 俊将

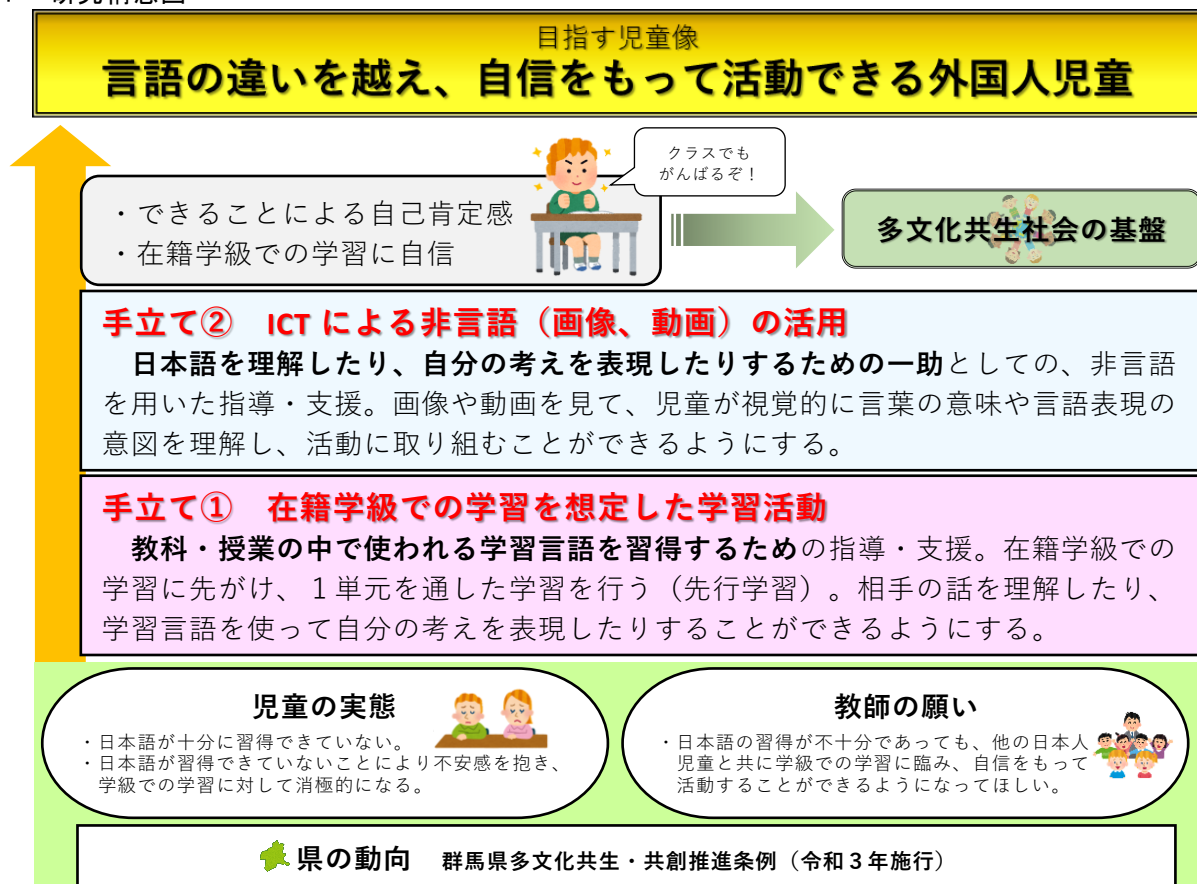
I 研究テーマ設定の理由

近年、国内で通学・就労し、生活している在留外国人の人口はますます増加しており、日本は外国人と共に暮らし、生きるという「共生」の時代を迎えつつある。本県では、国籍や在留資格が多様化したことによる様々な課題に対応するため、令和3年に「群馬県多文化共生・共創推進条例」が施行され、県民には共生の在り方を模索することが求められている。しかしながら、言語や文化的背景の異なる外国人とのコミュニケーションは容易ではない。教育現場においても、外国人児童・保護者との意思疎通の難しさや相互理解の機会が不十分な点など、多文化共生教育の課題が顕在化している。

国籍の多様化に伴い文化や言語も多様化・複雑化し、日本と外国の両方のルーツをもつ新たな世代も生まれている。そのような状況下において、自己を肯定的に捉え、誇りをもった外国人児童を育成することが多文化共生には必要である。そこで、在籍学級での学習に先がけ、日本語教室での学習において教科の1単元全体を学習することを通して、自信をもって活動できる外国人児童を育成することを目指し、本テーマを設定した。

II 研究内容

1 研究構想図



2 授業改善に向けた手立て

外国人児童が「授業で使われる日本語は分からない」という不安が軽減された状態で授業に臨むことができるよう、次の二つの手立てを設定した。

手立て1 在籍学級での学習を想定した学習活動

生活言語をある程度習得している外国人児童であっても、教科・授業の中で使われる学習言語を理解したり、それらを用いて自分の考えを表現したりする力が不十分であるケースは少なくない。そのため、在籍学級での学習を想定し、必要となる学習言語をあらかじめ習得し、それを活用することができるようにしておく必要がある。学習言語を習得するために、在籍学級での学習に先がけて1単元を通じた学習を行う（先行学習）ことで、児童が相手の話を理解したり、学習言語を使って自分の考えを表現したりすることができるようにする。

手立て2 ICTによる非言語（画像、動画）の活用

言語の習得には視覚的な情報が理解の助けとなることが多いため、言葉とイメージを結び付けることができるような指導や支援が必要である。そこで、日本語を理解したり表現したりするための一助として、非言語を用いた指導・支援を行う。画像を見たり動画を視聴したりするなどして、児童が視覚的に言葉の意味や言語表現の意図を理解し、活動に取り組むことができるようにする。

Ⅲ 研究のまとめ

1 成果

- 在籍学級での学習に備え、平易な言葉や単元の学習に係るキーワードを交えながら対話したことで、児童はよりよい形を探っていきながらねらいに合った文章を考えることができた。
- 文章を清書する前に見直しをさせたことで、より分かりやすい表現に気づき、読み手のことを意識した文章を書くことができた。
- 言語による説明に加え、本時の活動のモデル映像を併せて示すことで、児童が実際の活動を具体的にイメージしながら学習内容を理解し、活動に取り組むことができた。
- 児童が個々に ICT 端末を活用することで、必要に応じて言葉の意味を調べたり、前時の活動を確かめたりすることができた。

2 課題

- 児童が自発的に考えや意見を出すことができないことがあった。表現するための日本語の例を示すことや、十分に考える時間を取ったり段階的に考えることができるようにしたりすることで、児童が自分の考えを明確にもつことができるようにする工夫が必要である。
- 今回は本時の活動のみを示したモデル映像であったが、映像制作の時間と労力を考慮し、本単元全体の活動を一括して示したモデル映像を用意する方法も考えられる。各時間の学習活動を、モデル映像の該当部分で確かめることができる。
- 在籍学級との連携を深化させ、双方の学習内容・進捗についての情報を共有し、外国人児童が日本人児童と共に学習する機会や環境を、学校全体の課題として今後さらに整備していくことが必要である。

実践例

- 1 単元名 「せつめいのしかたに気をつけて読み、それをいかして書こう」
 (日本語教室第2学年・2学期)
- 教材名 「おもちゃの作り方をせつめいしよう」 光村図書

2 本単元について

本単元「おもちゃの作り方をせつめいしよう」は、おもちゃの作り方の説明文から説明の仕方の工夫を見つけ、その工夫を生かして自分で作ったおもちゃの作り方を書く教材となっている。児童は、おもちゃの作り方の説明文を読むことを通して、「まず」「つぎに」「それから」などの順序を表す言葉、事物の長さや数、写真や絵など、分かりやすく説明するために必要な工夫に気付くことができる。そして、その工夫を生かし、順序に沿った構成の文章を書くことができるようになる。

以上のような考えから、本単元では以下のような指導計画を構想し実践した。

目標	<p>「おもちゃの作り方をせつめいしよう」を読んで、説明から手順を示す文章の書き方や説明の工夫を見つけ、それらを使って実際に説明する文章を書くことを通して、次の事項を身に付けることができるよう指導する。</p> <p>ア おもちゃの作り方を説明する文章を書くために、共通、相違、事柄の順序など情報と情報との関係について理解すること。 (知識及び技能)</p> <p>イ おもちゃの作り方を説明する文章を書くために、自分の思いや考えが明確になるように、事柄の順序に沿って簡単な構成を考えること。 (思考力、判断力、表現力等)</p> <p>ウ 事柄の順序に沿って粘り強く構成を考え、学習課題に沿っておもちゃの作り方を説明する文章を書こうとしていること。 (学びに向かう力、人間性等)</p>	
評価 規 準	<p>(1) 共通、相違、事柄の順序など情報と情報との関係について理解している。 (知識・技能)</p> <p>(2) 自分の思いや考えが明確になるように、事柄の順序に沿って簡単な構成を考えている。 (思考・判断・表現)</p> <p>(3) 事柄の順序に沿って粘り強く構成を考え、学習課題に沿っておもちゃの作り方を説明する文章を書こうとしている。 (主体的に学習に取り組む態度)</p>	
過程	時間	主な学習活動
つかむ	第1時	・おもちゃギャラリーに展示したいおもちゃを決め、おもちゃ作りの説明文を書くことの見通しをもつ。
追究する	第2 ～4時	・「けん玉の作り方」を読みながら実際におもちゃを作ることを通して、説明の工夫を見つける。 ・ビデオ撮影をしながら選んだおもちゃを実際に作り、文章を組み立てる準備をする。
	第5時	・ビデオ映像を視聴しながら「せつめいカード」を書き、それらを順序に沿って組み合わせて文章全体の構成を考える。
	第6 ～7時	・「せつめいカード」を基にしながら文章の内容を考え、おもちゃの作り方を説明する文章を「おもちゃの作り方カード」に書く(文章の清書)。
まとめる	第8時	・おもちゃと「おもちゃの作り方カード」をおもちゃギャラリーに展示し、互いの文章を読み合う。

3 本時及び具体化した手立てについて

本時は全8時間計画の第5時に当たる。本時では、「せつめいカード」におもちゃ作りの工程を書き、それらを並び替えることを通して、順序に沿って文章を組み立てることができるようにすることをねらいとしている。そのための手立てとして、以下の方法を設定した。

手立て1 文章全体をどのような構成にするとよいか、話し合いながら考え、発表させる。

〈何を作るのか〉〈ざいりょうとどうぐ〉〈作り方〉〈あそび方〉の4要素を基に、この4要素をどの順序で組み立てるとよいか考えさせる。話し合いながら文章の構成を考えさせることを通して、児童が日本語で自分の意見を持ち、それを発表することができるようにする。

手立て2 日本語を聞いたり書いたりするための補助的なツールとしてICTを活用させる。

大型モニタで本時の活動のモデル映像を示す。口頭での説明を聞くことに加えこれを視聴することによって、実際の活動を具体的にイメージすることができるようにする。また、前時におもちゃ作りの様子を撮影したビデオ映像を児童の持つICT端末上で視聴しながら「せつめいカード」を書かせる。これによって、おもちゃ作りの工程を視覚的に確かめたり、そのときの教師との対話の内容を音声で聞いたりすることができる。ビデオ映像の視聴を通して、「せつめいカード」を分かりやすく書くことができるようにする。

4 授業の実際

(1) 本時の導入 めあての確認

前時でおもちゃの材料や道具、作り方を確かめながらおもちゃを作ったことと、その様子をビデオカメラで撮影したことについて振り返った。そして、本時でそのビデオ映像を視聴しながら「せつめいカード」に作り方の説明を書き、文章を組み立てることを確認した。

(2) 本時の展開① 文章全体の構成を考える

〈何を作るのか〉〈ざいりょうとどうぐ〉〈作り方〉〈あそび方〉の4要素を、どのような順序で組み立てて文章全体を構成するとよいか、児童同士で考えながら話し合った。最初、話し合う場面では児童間で活発に意見が交わされず、考えがまとまらなかった。その後は、教師の問いかけに応じる形で少しずつ自分の考えを発表し、それを聞いた他の児童がその考えに同意するなどして、意見の交流が行われた。児童Aは、「最初に〈何を作るのか〉を入れないと分かりづらい」と発言し、文章の冒頭で〈何を作るのか〉を書くべきであるという考えを述べた。他の児童もその考えに同意した。また、「〈作り方〉の後に〈あそび方〉を書かないと変だと思う」という考えも出てきたため、少しずつ文章全体の構成が固まっていた。そして、最終的に児童全体で1つの考えを導き出すことができ、〈何を作るのか〉〈ざいりょうとどうぐ〉〈作り方〉〈あそび方〉の順序で文章全体を組み立てることになった。

(3) 本時の展開② 〈作り方〉の説明の順序を考える

本時の活動の活動を示したモデル映像を視聴し、「せつめいカード」の書き方や並べ方について確認した(図1)。その後、おもちゃを作る様子を記録した映像をICT端末で視聴しながら、順序に沿って制作の工程を「せつめいカード」に短文で記入し、並べた(図2)。

児童Bは、ICT端末の映像をよく見ながらそこから聞こえる音声に注意深く耳を傾け、「せつめいカード」に作り方を書き出していった。しかし、映像から聞こえる音声を一言一句正確に書き取ろうとし、聞き取りにくい部分を書くのに時間がかかってしまった。児童Cは、おもちゃの材料である「磁石」の言い方を思い出せずにいたが、映像を見るとその言い方を思い出し、「せつめいカード」に書くことができた。児童Aは、読み手がおもちゃを作りやすいようにするために「せつめいカード」を入れ替えてもよいことを教師に伝えられると、少し考えた後で「せつめいカード」を入れ替えた。児童Cも、作りやすさを考え、実際の



図1 活動のやり方を示したモデル映像



図2 映像を視聴しながら「せつめいカード」を書く児童の様子

作り方の順序とは異なる別の順序に変更し「せつめいカード」を入れ替えた。

(4) 本時のまとめ

並べた「せつめいカード」を、児童がそれぞれの ICT 端末のカメラで撮影し、写真を保存した(図3)。振り返りでは、「(ビデオの映像があって)分かりやすかった」という発言があった。

(5) 本時後

第6～7時では、「せつめいカード」を基にして文章の内容を考え、おもちゃの作り方を説明する文章を「おもちゃの作り方カード」に書いた(図4)。最初に、内容のまとめりごとに「せつめいカード」のグループ分けをし、それらの上に「まず」「つぎに」「それから」「さいごに」などの順序を表す言葉を付けて、それぞれを文章の段落の骨組みとした。次に、より詳しく読みやすい内容になるように、言葉を付け足したり表現を言い換えたりして、文章全体を清書した。

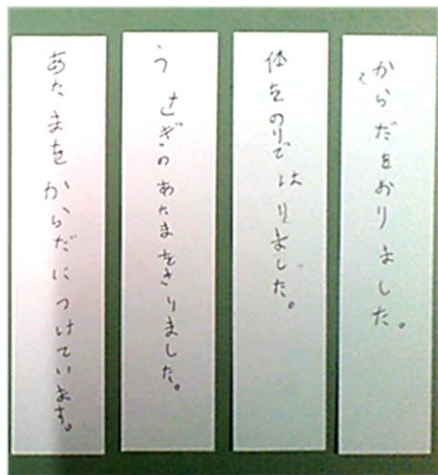


図3 「せつめいカード」

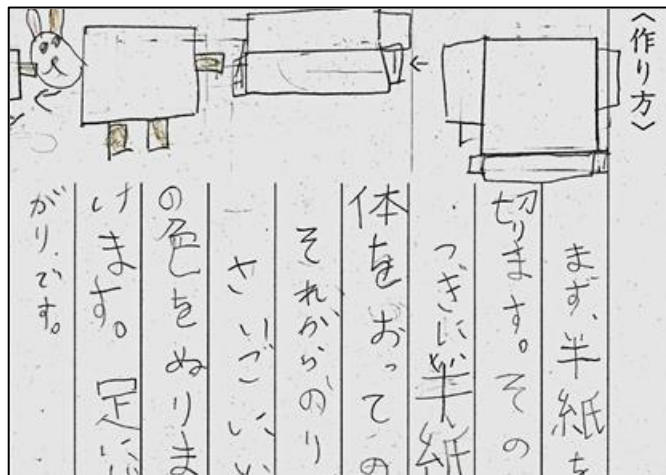


図4 「おもちゃの作り方カード」

5 考察

文章全体をどのような構成にするとよいかを話し合う活動では、文章構成の4要素の順序について、児童と対話をしながらよりよい順序を探っていき、児童は最もよいと考えられる一つの順序を導き出すことができた。より深く課題を理解し明確に考えを表現することができるよう、対話の前に児童が深く思考する時間を十分に確保する必要があると感じたが、児童が日本語で与えられた課題について思考し、考えを述べることができたことから、手立てとしては有効であったと考える。

「せつめいカード」を書く活動では、本時の活動のモデル映像を視聴したことで、児童は実際の活動を具体的にイメージし、学習内容を理解した上で取り組むことができた。また、活動中はビデオ映像を視聴したことで、どんな材料や道具でどのように作ったのかを動画及び音声で随時確認することができた。これにより、児童はスムーズに「せつめいカード」を書くことができた。記憶だけに頼らずおもちゃの作り方をビデオ映像で確認することができたため、児童は「せつめいカード」が書きやすかったことを実感していた。これらのことから、ICTを活用した映像による手立ても有効であったと考える。モデル映像については、今回は本時の活動のみを示したものであったが、本単元全体の活動を一括して示したモデル映像を用意する方法も考えられる。モデル映像の内容やその示し方についてはさまざまな方法が考えられる。児童の実態に合わせて、より効果的な方法を模索していく必要がある。

今回の実践を生かし、思考や表現のための日本語指導や、ICTの効果的な活用方法を更に検証していきたい。また、今回の実践を通して、外国人児童が自信をもって在籍学級での学習に臨むことができるよう日本語教室と在籍学級の連携を今後さらに深化させていく必要性を改めて感じるようになった。双方が互いの学習内容・進度についての情報を共有し、外国人児童が日本人児童と共に学習する機会や環境を、学校全体の課題として認識し整備していくことは欠かせなくなる。多文化共生社会の中でそのような学校づくりを、協力体制の下、継続的に進めていきたい。